

## 2021韓国図書特別展〈友情を紡ぐ〉展示図書リスト

No.	タイトル	著者	出版社	分類	出版日 (韓国)	本の紹介
1	さすらう地	キム・ス ム	(株) ウンヘン ナム出版社	小説	2020.04.27	読者の心に痕跡を残す作家、キム・スム。彼女の周到さと緻密さが創り出すストーリーの力とナラティブの密度は、読者や評論家に深い感動を与える。多大なエネルギーと感情の消耗を要する作品を書き、読点や三点リーダを一つ打つにも精魂を傾ける作家だ。こうして全力が注ぎ込まれた文学には、崇高さが残される。日本軍の慰安婦や養子、住処を追われた人など、疎外された弱者と根無しになった人々を見守ってきた著者は、本書で"ディアスポラ"を詠う。 『さすらう地』は、1937年にソ連の極東地域に暮らしていた高麗人17万人が、貨物列車で中央アジアに強制移住させられた事件を題材としている。貨物車両という劣悪な空間を背景に、列車に載せられた人々の声、特に女性の声を借りて、ディアスポラの運命を物語として拡張した本書は、悲哀と追慕が絡み合う時間を生きてきた高麗人の悲劇的な生き様、そして"根を張ること"を長年渴望した彼らの歴史を、痛切かつ詳らかに描いている。
2	燃えあがる心	イ・ドウ オン	(株) ウンヘン ナム出版社	小説	2020.07.02	イ・ドゥオン初の小説『あの子はもういない(原題『シスター』、文芸春秋)』は、「韓国文芸界の新たな波(宮部みゆき・讀賣新聞掲載)」という見出しの書評とともに日本に紹介された。二作目の長編小説となる『燃えあがる心』は、「連続殺人」で生計を立てたいと思ったら? という問いで幕を開ける。「殺人事件」で金儲けするという人間の暗い思惑が結集すると、村では奇怪な出来事が起こりはじめ、村人たちの過去が一点に収斂して我々の社会の暗い深淵に打撃を与える。 本書は、生存競争に敗れて絶望に追い詰められた人々に対する我々の社会の隠喩であり、また金銭に還元できないものを財貨とすると、個人の肉体は対象化され、不幸と貧困が陳列され、人間は死んでも死にきれない存在に転落してしまうという事実を明確に警告するものでもある。読者がこの異様で奇怪な村に心を奪われはじめるころ、殺人を計画する者と殺される者たちの秘密が、わずかな躊躇いもなく一挙に暴かれる。
3	仕事の喜びと哀 しみ	チャン・リ ュジン	チャンピ	小説	2019.10.25	チャン・リュジン初の小説集『仕事の喜びと哀しみ』は、ウェブサイト「創作と批評」で公開直後にSNSで急速に口コミが広がり、延べ40万ページビューを記録。サーバーがダウンするほど爆発的な反響を得た。 小説家チョン・イヒョンは本書を、「今日の韓国社会を表すタイムカプセルを作るとしたら必ず入れるべき作品」と評している。 本書に収録された小説8編は、主に2~30代の若い会社員たちの物語だ。それぞれの悲喜が込められた会社生活のディテールが極めてリアルに描写されている。その筆力は表題作に対する「現役」の読者からの熱烈な反響で既に証明されているが、作家はさらに一歩踏み込み、日常の重圧に苦しむ若者たちの痛みを丁寧に描きながらも、そのような状況下にあってもやがては輝き出す人生の大切な瞬間を、美しく書き表している。 涙は流しても絶望はせず、疲弊しても持ち前の知恵で持ち耐え、どうにかして人生に歓喜の場面を生み出そうとする、まさしく我々のストーリーが、本書の端々に染み込んでいる。
4	わたしになる夢	チェ・ジ ンヨン	現代文学	小説	2021.02.25	『わたしになる夢』は、消えてしまいたいほど深く傷ついた一人の女性が、幼少期からずっと一緒に過ごしてきた祖母の死をきっかけに、目を背けていた過去と向き合い、自分という存在と、自分と周囲の関係の真の意味を探る過程を精緻に描いた小説である。 これまでに8冊の長編小説と2冊の小説集を発表しているチェ・ジンヨンは、細やかな感受性と歯切れのよい語り口、光る文章力をもって韓国文壇で存在感を發揮している。 喪失を経験した女性、虐待家庭で育った少女、非正規で働く青年など、この時代の暗い現実を躊躇なく直視する著者は、本書を通して内面に押し込んだまま顧みることのなかった自分の傷の根源と遭遇するストーリーを展開している。幼少期を経て現在に至るまでに自分の目と体で経た後悔が染みついた"大人"たちの生活を振り返りながら、単なる大人ではなく、真の自分になるために奮闘する主人公に、胸が締め付けられる。
5	なんて似ている の	キム・ボ ヨン	アルザック・ リーヴル	小説	2020.10.31	米国最大の出版社ハーバーコリンズで韓国SF作家として初めて出版が予定されているキム・ボヨン。寡作で知られる著者が10年間かけて仕上げた、珠玉の短編コレクションだ。『ママには超能力がある』『赤頭巾の女性』『ニエン(年)が来る日』などの作品と一緒に、数点の選集に分かれて収録されていた貴重な短編が、一冊にまとめられている。小説家ムン・モクハはその推薦文で、キム・ボヨンは一つの短編に大変豊かな心象と多様な感情を配置して(恐ろしいほどの)調和を織り成す作家であるが、そのためか長編よりも短編の密度がより高いように感じられる、と評した。韓国のファンからは「もっともSFらしいSFを書く作家」と評価されている。
6	違う世界でも	イ・ヒョ ンソク	子音と母音	小説	2021.02.08	イ・ヒョンソク初の小説集。 著者は、きわめて同時代的な倫理と社会の問題を小説に解きほぐし、精巧で緻密な問いを投げかけるリアリストだ。さまざまな登場人物の多様で異質な声と視線を交差させてナラティブを構築しつつ、真剣に向き合うべき現実問題の細部と人間本来の矛盾的な立場をも認識させる。イ・ヒョンソクの小説は、現在の世界を批判的に厳しく記憶・記録することにより、忘却を阻止し、より良い未来をつくることを目指す、人生の文学である。

7	年年歳歳	ファン・ジョンウン	チャンピ	小説	2020.09.18	『年年歳歳』は著者が長年温めてきたテーマを取り上げた力作だ。昨年文芸誌に発表された『破壁』『言いたいこと』の2編と同時掲載された『無名』と『近づいてくるものたち』は、本書で初めて読者を得た。 ファン・ジョンウンは著者あとがきで、「これまでスンジャという名の人にしばしば出会ったが、どうしてこんなにスンジャが多いのだろう」という疑問からこのストーリーが生まれたと話す。『年年歳歳』に掲載された4編の小説は“1946年生まれのスンジャさん”であるイ・スンイルと、その娘であるハン・ヨンジンとハン・セジンの物語が、太い幹を成しながら繰り広げられる。母親と姉妹の過去と現在の日常を通して、今現在の韓国社会を振り返る。
8	シセンから、	チョン・セラ	文学ドンネ	小説	2020.06.05	韓国と米国に分かれて暮らす家族が、たった一度きりの祭祀（先祖供養の儀式）をともに過ごすためにハワイに飛び立つという、やや唐突な状況で始まる『シセンから、』は、現代史の悲劇と現在の女性に対する暴力、世の中の不条理を貫通しながらストーリーが進行する。美術家であり作家であり、時代を先取りする大人であったシム・シセン。彼女が二度の結婚で築いた特殊な家系の構成員たちは、ハワイで彼女に敬意を表しながら、それぞれ成長していく。 チョン・セラが著者あとがきで「この小説はなによりも、20世紀を生き抜いた女性たちに捧げる、21世紀の愛だ」と記したように、『シセンから、』はある時代の女性へ向けられる誠実で温かな“視線から”始まる作品だ。デビューから10年間、ジャンルを問わない多彩な手法でストーリーを展開し、ただの一度も読者を失望させない著者が、可愛らしい小説を書く作家から、愛をくり出す作家となって、読者のもとに戻ってきた。
9	明るい息	チョ・ヘジン	文学と知性社	小説	2021.03.09	疎外された者たちを言葉で抱きしめるチョ・ヘジンの小説集『明るい息』。著者はこれまでに、社会からつまはじきにされ、多様なスペクトラムの中でもっとも暗い位置に追いやられた移民や養子、貧しい労働者らの人生に彩りを与えてきた。本書でも、世間の死角に追い詰められた人々、例えば頼れる人のいないガン闘病中の中年女性や、水銀中毒を知らないまま働かされた未成年労働者、ろくな成果も挙げられないまま青春を無駄にして疲弊した男女の人生などにレンズを当てている。 著者は、彼らの人生がここで終わりを迎えるわけでは絶対ないという“切迫した思い”を抱き、“認識はされなくても存在はしている”人々それぞれの物語に、温もりを与える。
10	わたしたちが光の速さで進めないなら	キム・チョヨブ	Hubble (ハッブル)	小説	2019.06.24	バイオセンサー製造に従事する科学者だったキム・チョヨブが手掛けた小説。どこにも存在しない、しかしどこかには存在する想像の世界を独特の筆致で手に取るように描き、正常と非正常、成功と失敗、主流と非主流の境界を絶え間なく問いつづける小説家だ。 2017年に『館内紛失』で第2回韓国科学文学賞中短編部門大賞、『わたしたちが光の速度で進めないなら』で佳作を同時受賞してデビュー。当時審査員を務めた小説家ベ・ミヨンフンとキム・ボヨンは「作家は自ら問わなければならない、その問いを作品を通して人々の鼻先に突きつけなければならない。その結果、作家と作品はおのずから輝き、美しくなる。この『館内紛失』のように、また「悲しみに屈せず、もしかしたら永遠にたどり着けないかもしれなくても自身の生命をかけてその意志を最後まで貫こうとする点で、本書（『わたしたちが光の速度で進めないなら』）は感動を呼び起こす」と評した。
11	テーピング	ユン・イヒョン	作家精神	小説	2020.01.14	“友情”という関係の中に逆巻く複雑で内密な感情を、鋭い問題意識と細密な文体で描写し、著者が現在打ち込んでいるテーマ“女性のナラティブ”をもっとも的確に描き出した作品の一つである。 本書では、家柄、学歴、年齢、職業などすべて異なる女性たちの各々のナラティブが連続する。不法撮影の被害に遭った友人を助けられなかった美容師のジヒョン、映画宣伝会社に勤めるワーキングマザーであり意識不明の息子ソギョンを持つウンジョン、ソギョンと同じクラスの女の子ユリアの母親ジンギョン、ジンギョンの親友である出版プロデューサーのセヨンと、バトンをつなぐように連続する各人の物語は、個人の傷だけではなく、我々の社会の死角に存在する患部にも触れる。
12	七年の最後	キム・ヨンス	文学ドンネ	小説	2020.07.01	本書は、これまでのキム・ヨンス作品の核心を成すキーワードである青春、愛、歴史、個人をすべて盛り込み、朝鮮戦争以降急激に変化した世界に直面する詩人“キヘン”の人生を描いている。 1930年から1940年代の人気詩人であること、朝鮮戦争後の北朝鮮で党の意向に沿った詩を作らされたこと、ロシア文学を朝鮮語に翻訳する仕事に就くことから、キヘンのモデルが韓国の高名な詩人“白石（ベクソク）”であることが窺える。 キヘンは自由に詩作ができず、“夢と希望抜きで生きる方法”を習得しなければならないという絶望的な状況の中でもどうか詩を作ろうとするが、何度も現実の壁に衝突する。詩作への思いがどれほど真摯であっても、個人を抑圧する現実が圧倒的に重ければ、その思いはいつか挫折を迎えるのだろうか。現実の前で途方に暮れた作家にできることは、何か。捨て去ることなど到底できない思いと、ついに叶わなかった夢は、どうなってしまうのか。『七年の最後』は、一人の市民であり作家であるキム・ヨンスがこのような問いを胸に暗い時代を生き抜いた末に、ついに出した解答のように感じられる。

13	ほくが話してるじゃんか	チョン・ヨンジュン	民音社	小説	2020.06.26	14歳の少年が言語矯正院に通うことで言語的・心理的障がい克服していく過程を描いた小説。吃音症を持つ人物はチョン・ヨンジュンの作品にこれまで多く登場してきたが、本書ではその心象風景を14歳の少年の声にのせることで、言語的欠乏がもたらす苦痛と苦悶の過程を、ひととき逼迫した筆致で表現している。 言語をスムーズに口に出せない心理的な災難さながらの状況のせいで、少年は、家族のみならず学校や友人関係など自分の属する世界から排除され、幽霊のように生きている。自分を深く憎みながら、そして自分を傷つける人々へのささやかな復讐を心に決めながら。 世界に面した心の扉を閉じた少年が、言語矯正院で出会った人々と親交を深めて心の中に道を拓きながら、世界に通じる自分だけの扉を造り上げる過程は、他者の人生を深く理解することで自身の人生を温かく肯定することにつながる、長くも短い旅路である。
14	息	韓裕周	文学実験室	小説	2020.11.05	韓裕周（ハン・ウジュ）の作品世界は周知のように、韓国文学の美学的重石に耐えんとする一つの端的でユニークなアイコンであるといえる。本書では“死”と“犬”が繰り返し登場する。死んだ犬の命にはどんな意味があったのか。犬はなぜ吠えるのか。過去にも生命の根源的な虚構性と無意味性を注視してきた著者が、本書で死を正面から見据える。 著者は、“我々が生きるストーリー過剰時代に、この巧妙に裁断された‘ストーリー自体の真実味を正面から問題視する小説’と、“ストーリーを拒否しつつも小説が構築される過程を、そのとき発現する小説の新たな力が何であるかを提示する小説”（韓国日報文学賞選出に際し）、さらに“偽りの記憶との争い、絶え間なくストーリーを消し去る創作活動”（キム・ヒョン文学杯選出に際し）という賛辞を得ている。まさしく、自身ならではの執筆スタイルで韓国文学に新たな息を吹き込んできた作家である。
15	不便なコンビニ	キム・ホヨン	木の横の椅子	小説	2021.04.20	青坡（チョンパ）洞の路地の角にある小さなコンビニを舞台に、苦難の時代を生きる我々の隣人の生活の内情と喜怒哀楽を、温かくユーモラスに描いた作品。ソウル駅の路上で暮らしていたトクゴという男が、ある日70代の女性の財布を拾った縁で、彼女が経営するコンビニで夜間のアルバイトを始める。クマのような図体のトクゴはアルコール性痴呆で過去の記憶を失っているうえに、口下手で動きも鈍く、はたして接客業が務まるのかと心配になるが、意外にも仕事を手際よくこなすうえに、なぜか近隣住民の心まで掴んで、夜間のコンビニを守る頼れるプロになっていく。
16	キリンの心臓	李相煜	交遊堂／蛟猶書架	小説	2021.04.19	表題作『キリンの心臓』を含め全9編の短編を収録した本書は、人間を食べる宇宙生物の侵略、子どもの死、性格の欠陥、産業災害、職場での諍いなど、人間に降りかかるさまざまな不運を取り上げる。 地球を占領してきた宇宙人の甘い食材になり果てた地球人を描く『ある詩人の死』、肉体を同期化する技術が発達した近未来で、他人のために肉体を鍛えなければならない労働者の悲劇『ライナ・ヌーン』、人生の方向を見失って架空の動物園を彷徨う者たちの物語『キリンの心臓』など、奇抜な創造力が存分に発揮された作品が目白押しで、ページをめくる指が止まらない。本書は不運にしかたがないような不自由な世界を論じているが、なかでも不運は社会的弱者・強者の両方に無差別に訪れる一方、強者は相対的に不運から逃れる方法を持っている、と断じる点が印象深い。
17	君の世界に	チョ・ユンギョン	ハピリス	小説	2021.04.19	アイドルグループの世界観を、その美しく幻想的でストーリー性豊かな歌詞で音楽に溶け込ませる作詞家チョ・ユンギョン初の小説。自伝的ファンタジー小説ともいえる本書では、著者の作詞家のライフスタイルを極事実主義的に詳細に描写しつつ、星に乗ってやってきて現実感をたやすく壊してしまう“君”という存在との化学反応が、現実・夢・想像の境界を行き来しながら愉快地広がっていく。著者自身が選んだ12曲を一つのストーリーが貫いており、またQRコードがYouTubeと連動していて、曲を聞きながら読書を楽しめる点も新鮮だ。また、曲に関する著者の言葉も収録されており、音楽の裏話を垣間見ることができる。恋愛ファンタジー小説が好きな人はもちろんのこと、アイドルグループのファンや作詞に興味がある人が、自分ならではの楽しみ方を発見できる作品。
18	長い長い夜	ルリ	文学ドンネ	小説	2021.02.03	自分がこの世で最後のサイになったとしたら、大切な者を全部失い、“最後に唯一残った存在”の重みを全身全霊で受け止めなければならないとしたら、どんな気持ちになるだろう。友だちの最後の願いを叶えるため、幼い生命が安心して居場所を求めて見たこともない海を目指すのは、どんな気持ちだろう。 本書は、地球上の最後の一頭となったシロサイのノドゥンと、捨てられた卵から孵った幼いペンギンが、数え切れないほどの長い長い夜を一緒に過ごしながら、海を探しにいく物語だ。おぼつかない足でもデコボコ道の上で再び立ち上げられるのは、そして長くて暗くて眠れない夜を何とかして明るくするのは、“汚い水たまりにも浮かぶ星”のような意志であり、愛であり、運命感なのである。スーダンで始まる『長い長い夜』は、“圧倒的な感動の力”、“人生の意味を質す深い問いと、それを求める過程の厳かさ”、“絶滅の危機にあるサイと極限状態でも諦めないペンギンの姿を美しく描いた作品”と絶賛された。

19	散歩を聞く時間	鄭恩	四季節出版社	小説	2018.08.20	19歳のスジは、耳が聞こえなくても自分が不幸だと思ったことはない。子どものころからママとスジだけが知っている手話で完璧に会話できたし、どんな音でも想像して作り出すことができたから。でもある日、人工内耳手術を受けたことで、すべてが変わりはじめる。完璧だった沈黙の世界から不完全な騒音の世界に移されたスジは、慣れない世界に適応するために新しい生き方を模索する。目や耳ではなく、心で世界を把握するスジを通じて、読者はありのままの自身と向き合う方法を知ることになるだろう。 著者は個性豊かなキャラクターと軽快なユーモア要素を自然に取り入れ、家族の不在と障がいといった深刻な社会問題を明るく描いている。耳は聞こえなくても他の若者と同じように未来を悩み、誰かに恋する平凡な10代の少女の感性を詳らかに描写する文章は、慈しむように丁寧に読みたくなる。
20	雪で作った人	チェ・ウンミ	文学ドンネ	小説	2021.06.11	『ここ、私たち、向き合う』『雪で作った人』をはじめ、2016年から2020年までに書かれた9編の短編を収録した小説集。 10代の少女、親を亡くした女性、既婚女性などさまざまな人物が登場する本書は、我々が彼女らに抱く一般的なイメージから遠く離れることで、何も縛られていないからこそ、どこへだって行けるという解放のバトスを示している。
21	気候変動時代の愛	金琦昶	民音社	小説	2021.04.02	『気候変動時代の愛』は、今や全人類の核心的課題に挙げられる気候変動をテーマとした短編小説集。異常気象の影響で発生するさまざまな状況と、それによる変化を事実に基づきながらも幻想的なストーリーに仕立てている。 記録的な猛暑、急増する台風、異常高温現象、エネルギー問題を取り巻く葛藤、半年近く燃え続けて森林面積の14%が失われたオーストラリアの山火事……。過去数年間で異常な気象現象は深刻さを増し、頻発する災害は我々の生活条件に変化をもたらしている。 気候変動は、もはや氷の世界のホッキョクグマの話ではない。我々自身の話であり、今ここにある問題だ。ならば、どうするべきか。今すぐできることは何か。この漠然とした、しかし切実な問いから物語は始まる。
22	そばにいたということ	キム・ジュンミ	チャンピ	小説	2021.03.26	10代の女の子ジウ、カンイ、ヨウリを中心に、祖母、母、娘と世代を重ねながら続いていく命の多様な側面を描き、韓国近現代史の大きなうねりを生き抜いた平凡な隣人の人生に敬意を示す作品である。ますます激化する貧富の差、若い非正規労働者の危険な職場環境など、今この瞬間に存在している韓国社会の問題に正面から向き合い、連帯と共助に対する社会の関心を喚起する。 高3になったジウには、ウンガン紡織闘争を率いた解雇労働者であった大叔母の人生を小説に書くという夢がある。カンイはウンガン紡織で働いていた母が若くして亡くなった後、母方の祖母と暮らしており、プライドチキン屋でアルバイトをしながら准看護師を目指している。ヨウリは貧しいウンガンの町を出るために教育大学に進学しようと入試勉強の真最中だ。それぞれ家庭環境も夢も異なるが、いつしか三人は互いを頼りにするようになる。そんなある日、ウンガン区を“観光資源化”するという名目を掲げた区役所が、住民の生活空間を侵害する“ウサギ小屋体験館”計画を推進しはじめる。
23	考古心霊学者	裴明勳	ブックハウス	小説	2017.08.18	小説の中の考古心霊学者たちが研究する“考古心霊学”は、考古学研究の手がかりになる心霊現象を科学的に推定し、歴史研究の途切れた糸をつなぐ学問だ。物語の主人公は、韓国考古心霊学の大家だった師の死後、その書齋を片付けながら研究をデータベース化する作業をしている若い考古心霊学者チョ・ウンス。未来が不安定な考古心霊学の学生として地味な生活を送っていたウンスは、ある日突然ソウル中心部に高さ30m以上もある黒い城壁が出現するのを目撃する。城壁の出現はその後も何度も繰り返す、そのたびに原因不明の自殺者が増え、非現実的な目撃談が相次ぐ。 やがて都会の真ん中で頻りに起こる城壁の出現が、ある種の“心霊現象”だと考えるようになったウンスは、その秘密を解くための手がかりを師の書齋で探し始める。事件の真相に近づくと、顛末を知る人が誰もいない大災害を記録した古文書を見つける。
24	夏の丘で習ったこと	アン・ヒヨン	チャンピ	詩	2020.07.24	2012年のデビュー後、活発な創作活動を続けてきたアン・ヒヨンの三作目となる詩集。創作活動だけではなく、セウォル号の犠牲者に捧げる「304朗読会」などの社会活動にも積極的に携わり、多くの人々に敬愛されている詩人である。 本書では、より深みを増した詩的思考と、繊細な言語感覚を駆使した抒情と感性が多彩に交差する詩の世界が繰り広げられる。人生の底辺を見つめ、世の中のあらゆる悲しみを掬い取るうとする“悟りの寓話のような”（イ・ジェニによる書評）熱く切ない詩の数々が、胸の奥深くで共感を呼び起こす。「2020年今日の詩」を受賞した『スベア』をはじめ57編の詩が、三部構成で綴られている。
25	なんのおつかいに行くの？	キム・ヘンスク	文学と知性社	詩	2020.07.22	2020年にデビュー21周年を迎えたキム・ヘンスクの六作目となる詩集。柔軟に変奏される形象の世界、“和らぐ表情”と“反射するこだま”を見つめてきた詩人だ。完璧に到達することも、まったく新たに生まれ変わらせることも不可能な執筆者の宿命に直面し、“真の言葉の可能性”を根気強く模索してきた著者は、本書で自身の苦悩を“おつかいのKが吐露するストーリー”として具体化する。カフカ、ゲーテ、キ・ヒョンドなど先人たちの言葉が著者の詩にそのまま取り入れられているかのように見えるが、著者の記憶の引き出しに長年しまわれていた間に割れたり汚れたりしたかのように、まったく異なるストーリーとして自然に展開している。 “偽物の偽物が繰り返し反射する嘘の世界”であるが、それが“我々の世界の真の姿”（文学評論家バク・スルギの言葉）であることを提示する著者。“文学”という謎を前に答えを求めるとは、問いを増幅させることで詩を創りつづけるキム・ヘンスクは、よく知っているはずなのになぜか新しいストーリーを腕いっぱい抱え、おつかいから戻ってくる。

26	君のそこが小さくて僕のここが大きいから僕らは別れようとしています	キム・ミンジョン	文学と知性社	詩	2019.12.10	人気詩人であり、編集者としても成功しているキム・ミンジョン。本書は、44歳の冬に44編の詩を取めた、四作目の詩集である。 詩の創作に強烈な情熱を傾けている著者を、詩こそが生かしているといってもいいだろう。長年、「詩の境界を往來する」という賛辞を与えられてきた詩人である。著者がデビュー作以降ひたむきに問いつづけてきた詩と言語。堅苦しい慣習の壁を軽やかに押し広げ、我々が蔑ろにしてきた世界に言語を与える著者が発表した本書には、著者の中で変わることなく滾る詩人としての意志と使命が顕在している。
27	宇宙的なアンニョン	ハ・ジェヨン	文学と知性社	詩	2019.04.24	初めての出会いにも最後の離別にも使われる言葉「アンニョン」。著者が差し出すのは、始まりの挨拶だろうか、締めくくりの挨拶だろうか。終わり始まりを一線の上に配列する詩であれば、この問いに対する適切な答えを容易に出せるだろう。しかし、ハ・ジェヨンの詩は我々が慣れている線形的な詩空間の概念をぶつ切りし、その隙間に広がるスペースに世の中のあらゆる事柄を吸収させ、混ぜ合わせる。 その世界で「アンニョン」を我々がよく知る意味で解釈することは不可能のようだ。著者が差し出す「アンニョン」は、まったく異なる意味を作り出し、新しい可能性を内包した単語として作用する。終わりの見えない、無限の拡張性を持つ世界。「ン」で始まり、「ン」で終わるハ・ジェヨンからの挨拶『宇宙的なアンニョン』を、読者に差し出す。
28	羽根の幻肢痛	キム・ヘスン	文学と知性社	詩	2019.03.31	キム・ヘスンにとって女性とは“自身の身体の中で浮き沈みしながら満ち欠けする月のように、死んで生きる自身のアイデンティティ”を持つ存在だ。“そのため、女性の身体は無限大のフラクタル図形である”とする著者は、自身の詩が“フラクタル図形のように世界に取り込まれ、世の中を読み解く方法を得ることを願う”と告白する。著者はこのように“身体をする”詩を書き、“詩をする”40年を歩んできた。 キム・ヘスンの詩集を貫く“固有の実存的な声があるとしても、詩人の表現を借りればその実存の実態は”常に循環するが、同じ図形は二度と描かない波動”を論じたのは、11年前にキム・ヘスン九作目の詩集『あなたの初め』の解説を手掛けた評論家イ・クァンホだ。 本書でも解説を務めたイ・クァンホは、キム・ヘスンが詩作を開始した1979年以降40年間の韓国文学における変化を観察する。そして1980年代の急進的な挑戦、1990年代の新たな感受性の登場、そして現代のフェミニズムに揺れ動く時間まで、キム・ヘスンの詩はその局面に風穴を開ける作業を止めなかったと述べる。
29	生乾きのTシャツを着て	キム・イドウム	現代文学	詩	2019.08.31	歯切れよく率直な言葉で独特のパワーが満ちた詩の世界を築いてきたキム・イドウムの小詩集『生乾きのTシャツを着て』は、散文詩の形式を探りながらも、“依然として純度の高い詩情を失わない”自由な語法が駆使されている。著者がこれまで築いてきた詩の世界を、さらに広げた作品である。
30	キルト、そしてキルト	チュ・ミンヒョン	文学ドネ	詩	2020.03.10	“世界を観察する視線に勢いがあり、意欲が溢れる”という評を携えて2017年にデビューしたチュ・ミンヒョンの初の詩集。 長年悩み、直視してきた者だけが習得できる言語で精緻に書き上げた55編の詩を、「第一部：我々は人間のふりをしつづける」「第二部：ここの隣人は夜、寝ないようだ」「第三部：いびきをかく人々は鼻しか残っていないみたいに」「第四部：愛はあるだろう、ネズミが暮らす窓辺にだって」の四部構成で綴る。
31	バトル・グラウンド	ムン・ボヨン	現代文学	詩	2019.08.31	2016年のデビュー後最短で「キム・スヨン文学賞」を受賞して話題となったムン・ボヨンの二作目となる詩集。戦争が起こるオンラインゲームの中の島を文学的舞臺として蘇らせた。
32	愛のための繰り返し	ファン・インチャン	チャンピ	詩	2019.11.30	2010年のデビュー以来、従来の詩の伝統をひと息に覆す個性的な発想で、評論家のみならず多くの読者の人気を得たファン・インチャンの三作目となる詩集。4年ぶりとなった本書で、著者は進化してひととき透明感を増した抒情性を余すことなく披露している。日常をつぶさに観察し、人生の価値と存在の意味を喚起する“冷たい情念で空っぽにされた詩”(キム・ヒョンによる推薦文)が、深い感動を胸に残す。
33	光の網	チェ・ジョンレ	チャンピ	詩	2020.11.13	ジョン・ジョンレは本書で空間と時間の混沌の中で詩的な問いを投げかけつつ、自身の道を歩む詩、この場所を語ると同時にあの場所を語るアレゴリーの詩を披露している。 精密な物語構造の内部で、具体的な言語と冷徹な直観力をもって日常の多彩な風景を描きだす散文詩の新境地と魅力を見せる本書から、我々は“どんな危機と試練にあっても損なわれない人間の神秘”(キム・インファンによる推薦文)を読み取ることができる。30年間、闊達な創造力と独特な語法でユニークな詩の世界を築き上げながらも、絶え間なく詩的冒険を続け、進化を止めない著者の苦悶がありありと窺える作品だ。

34	死者の家の掃除	金完(キムワン)	金寧社(キムヨン社)	エッセイ(人文/科学)	2020.05.30	<p>数多のメディアの注目を浴びた特殊清掃人のエッセイ。孤独死があった家、ゴミが山積みの家、汚物や動物の死体でいっぱいの家……。気軽に見ることも片付けることもできない場所を掃除する特殊清掃会社「ハードワークス」代表の金完(キムワン)による、特別な死の物語だ。</p> <p>“特殊”清掃という単語からも分かるように、その仕事場にあるのは普通ではない事情ばかりだ。例えば自殺する直前にゴミを分別した人や、自宅を掃除する“費用”を集めた後に自殺した人。現場の話を中心に上げた第一章では、作り話かと疑いたくなるほど非現実的な実話が、第二章では特殊清掃人ならではの苦労とやりがい、職業病、オカルト的な心霊の話などの多彩なエピソードが繰り広げられ、著者の仕事の様子をまざまざと伝えてくれる。まるで現場に立っているような疑似体験ができるだけでなく、「どのように生きるべきか」「どのような死を迎えたいか」を考えさせる作品。特殊清掃人の仕事を通じて、自分の人生を振り返る貴重な機会を与えてくれる。</p>
35	子どもという世界	金昭栄	四季節出版社	エッセイ(人文/科学)	2020.11.16	<p>子どもについて考えれば考えるほど、我々の世界は広がる。子どもはよく見えない。体が小さいからでも、声が小さいからでもある。養育や教育、育児に携わっているのでもない限り、近くに子どもが“いる”という事実を認識しないで暮らしてしまいがちだ。児童書の編集者を10年以上務め、現在は読書教室で子どもたちと本を読むキム・ソヨンは、子どもの存在をより可視化しようと、熱心に文を書き、声を出してきた。</p> <p>本書には、彼女が子どもたちと触れ合うなかで発見した、幼く弱い存在が慌たたく学びを身に付けながら育つ世界が描かれている。この世界の子どもたちは、我々の近くにいる子どもであり、誰もがかつて通過してきた子どもでもあり、ともに暮らす市民であり、次世代を担う子どもでもある。</p> <p>子どもをより深く理解しようとする努力は、自分自身や隣人、我々の社会を隅々まで観察しようとする意思と変わらない。本書を通じて我々は、誰もが経験するものの、重要だとはいえなかった子どもに関する話をようやく始められるのだろう。</p>
36	サイボーグになる	金草葉/金源永	四季節出版社	エッセイ(人文/科学)	2021.01.15	<p>人工知能、ロボット、IoT、自動走行、バーチャルリアリティなど、今日の“未来”という言葉で構成する内容を見ると、まるでその未来は、人間の肉体とは無関係に展開するように思える。人間の介入を最小限に抑えて動いていく世界、高度な技術を駆使し、人間の生物学的限界を超えた身体が導く社会は、苦痛も葛藤も不可能もない、便利で円滑な場所なのだろうか。15歳の頃から身体障がいや補う機器(補聴器と車椅子)を使い、“サイボーグ”として生きてきた金草葉と金源永は、人間の身体と科学技術が出会う現場に関心を寄せてきた。二人は、今日の科学技術が多様な身体と感覚を持つ個人の具体的な経験を考慮しないまま発展してはいないか、という問題意識を共有する。</p> <p>金草葉と金源永はそれぞれ聴覚と肢体に障がいを持って生きてきた経験と、障がい者権利運動の現場の中で培ってきたアイデンティティの認識に基づき、障がいというパーソナルな経験が他者、環境、社会との関係の中で科学技術と結合したときに我々が迎えるだろう明日を提示する。二人は各自が長年抱えてきた問題意識をより遠く深く突き詰め、ついにはこの世界を構成する多様な人々があらゆる立場と正常さの基準を超え、互いを再発見して受容する未来を描く。</p>
37	やってみないとわからないから	イ・ギルボラ	文学ドンネ	エッセイ(人文/科学)	2020.08.18	<p>独立系ドキュメンタリー映画の監督であり“ロードスクーラー”であるイ・ギルボラがオランダ・アムステルダムでの留学生活で新たに得た学びと悩みを、自身の視点と思考で表した散文である。社会の基準や両親の意志に従うのではなく、自分で人生と勉強の方向性を定め、自力で道を切り開いていくロードスクーラーである筆者のアムステルダム留学記は、生き生きとして鋭く、若者の美しいストーリーが詰まっている。</p> <p>ありきたりの留学サクセスストーリーや異文化体験記とは一線を画す。作品に込められた、自身の人生と芸術を自ら開拓する“インディペンデント”な若い女性の“道路上での学び”は、この世を生きながらもまた別の人生と対峙することが可能であると、繊細かつユーモアたっぷりに示してくれる。</p>
38	ただ、人間	洪恩全(ホン・ウンジョン)	春の日の本	エッセイ(人文/科学)	2020.09.25	<p>著者によるノドゥル夜間学校退学後の5年間の私的かつ公的な記録である、とありきたりの要約ができる作品だ。ノドゥル夜間学校の20年間を記録した『黄色い草原の夢』に続く第二作目であり著者初のコラム集でもある、と簡単に紹介することもできる。</p> <p>しかし、その時間の中で起こった著者の劇的(!)な変化と、逆にほとんど変わらない(またはむしろ退化した)我々の社会の真の姿を鑑みると、本書は、我々の社会の中における非力な弱者たち、非力な存在たちの人生(特に“苦痛”と“抵抗”)を、もっとも率直に、もっとも激烈に、もっとも抒情的に書き記した記録だ、と評することもできる。そこに込められた著者の思いは、ちっぽけな存在——だからこそより大切な存在——に熱く全身で接する思慮深い作家の思いに他ならない。</p>
39	植物の本	イ・ソヨン	本を読む水曜日	エッセイ(人文/科学)	2019.10.25	<p>公園や街路樹、庭園はもちろんのこと、植物を活用したインテリアを意味する“プランテリア”という言葉もお馴染みになったほど、植物は我々の生活に今や深く根付いている。しかし私たちは身近な植物のことを、どれほど知っているだろうか?</p> <p>国立樹木園、農村振興庁などの国内外の研究機関と協力して植物画を描き、植物を近くで観察してきた植物細密画家イ・ソヨンが、松、イチヨウ、レンギョウ、モンステラ、イチゴなど、身近にあるのによく知らなかった都市植物にまつわる興味深い話を、細密画とともに伝える。</p> <p>*本文中の小さな茶色のシミは、古書らしきを出すためのデザインです。</p>

40	人間の居場所	全致亨	イウム	エッセイ (人文/科学)	2019.04.21	2017年11月、濟州道のとある工場で現場実習中だった特性化（実業系）高校3年生イ・ミンホさんが、一人で作業中に製品積載用プレス機に挟まれ死亡した。彼が上司に送信した「もう一人寄こしてください」というメールは、労働環境の過酷さを示す象徴として広まった。本書の著者であり、KAIST科学技術政策大学院で教授職にある全致亨（チョン・チヒョン）は、この事件に“第4次産業革命”時代の韓国社会の悲劇を見た。イさんのメールの中に、ロボットと自動機械システムのなかで無残にも狭められた人間の持ち場から噴出した悲鳴を聞いた。この状況をもたらした責任は、誰にあるのか。メールを無視した上司か、人手を大幅削減した工場主か、現場を管理・監督するべきだった政府機関か。多くの人が無能な政府と強欲な資本家を非難していたとき、著者は重く異質な質問を静かに投げかけた。科学はこのような悲劇から自由でありえるのか、と。
41	これから訪れる愛	チョン・ヘユン	ユーゴー	エッセイ (人文/科学)	2020.12.05	『デカメロン』の形式を借りた10編の愛の物語。“地球温暖化時代の大河小説”であるマーガレット・アトウッドの「マッドアダム三部作」、オオヤマネコの忘れられない運命を描いたルイス・セプルベタ『ラプストリーを読む老人』、工場畜産と遺伝子組換え植物の残酷さを暴露したミシェル・ウエルベック『セロトニン』、孤独な労働の最中に一瞬でも共にいることの温もりを感じられる純粋な時間に関するジョン・バージャー作品、ヒトラーの軍隊から植物の種子を守ったヴァヴィロフとその同僚たちの話は、個人と社会の関係、動物と人間の不均衡な関係を示すと同時に、我々に今のような変化が必要なのかを“気づかせて”くれる。著者は言う。「想像もつかなかった巨大な断絶の時期を迎えている今、この亀裂の中から何か良いものが出てこなければならぬ。我々の行動次第である。我々自身が無力だと思った瞬間、愚かさがかはびこり、凶事が起こる」
42	重工業家族のユートピア	ヤン・スンフン	五月の春	エッセイ (人文/科学)	2019.01.24	慶南大学の社会学科教授であり、造船産業全般の問題を積極的に取り上げてきた著者が、造船所での勤務経験をもとに、危機下にある造船産業と、その中心地である巨済島および造船所の人々を本格的に取材した作品。20年近く好況を謳歌していた韓国の造船業界は、2015年の大宇造船の経営難を転機に、辛酸を舐めることとなった。筆者は造船業は現在の危機をバネにより良い方向に成長できるはずだという考えを持ち、造船所の現場労働者とその家族の生活と文化を、詳細に記述している。危機の原因を、1960年代に始まった造船産業の歴史の中で仔細に分析しつつ、造船所での勤務経験を生かして、実際に現場で働く人々がこの危機をどのように体感しているかを生々しく伝えようとしている。造船所の象徴ともいえる“貴族労組”正規労働者を中心とする“重工業家族”の他にも、下請け労働者、事務補助職の女性、造船所への就職を控えた女子高生、造船所の長い慣習に反旗を翻した若いエンジニア、女性エンジニアなど、これまで目の目を見なかった人々の立場をあまねく観察することにより、危機の本質を考察する。
43	BTS オン・ザ・ロード	ホン・ソクキョン	Across Publishing Group Inc.	エッセイ (人文/科学)	2020.11.22	世界のポップカルチャーの辺境で誕生し、常に成長しながら自分たちの物語を書き続けるアーティスト、BTS。韓国屈指の韓流研究者であるソウル大学言論情報学科教授ホン・ソクキョンが、その成功の秘密と意味を解説する。韓国書籍としては珍しく、出版前から日本や中国など世界中の出版社から版権の問い合わせが入っている本書は、韓流とK-POPの限界をクリエイティビティによって超え、全世界でもっとも強力な文化商品として頭角を現したBTSを、文化産業、社会、メディアの観点から全方位的に分析している。SNSとYouTubeを活用したポップカルチャーの形成・伝播の代表事例となったBTSの成功要因は何か。彼らが開放した新世代・文化・人種・ジェンダーの経験は、世界中の人々にどのような影響を及ぼし、変化をもたらしたか。この過程において伝統的な文化の媒介者の権力がいかに再配置され、新しい文化の生産と享有のシステムがいかに形成されていったか。専門家の見解と現場の声を見事に融合させて論じている。
44	わたしの心をケアする時間	金慧怜	ガナ出版社	エッセイ (人文/科学)	2020.07.03	過去にないほど物質的に豊かで便利な生活を享受しているにも関わらず、心が安らがない現代人が必要とする“心のケア技術”の指南本。多くの人が心の問題を抱えている。他人の視線に気に掛けず、無視してしまおうと心掛けてはいても、SNSのせいで我々は目覚めた瞬間から寝る直前まで、数多くの人々の生活に毎日のように接しながら過ごしている。比較が日常となり、競争が激しくなるほど、人々は心の余裕を失い、追われるように生きる。我々は、他人を傷つける言葉をはばからずに発する人のせいで苦痛を抱くこともあるし、自分よりもいい人生を送っているように見える他人の姿に引け目を感じて自責することもある。頑張ろうと決心しても、自分の意志と反してしきりに動揺したり委縮したりする心のせいで、苦悶する。そしてこんなふうにするのだ。「いちばん思い通りにならないのは、わたしの心だ」と。
45	物質の物理学	韓政勲	金寧（キムヨン）社	エッセイ (人文/科学)	2020.9.25	質量はどのように生まれたのか。光は物質なのだろうか。磁石はなぜ磁石なのか。どうして電気を通す物質と通さない物質があるのだろうか。二次元物質や一次元物質は存在するのだろうか。“物質”とは、いったい何か。『物質の物理学』は、物理学の根源的な質問を探究する過程で発見されたグラフェン、超伝導体、量子ホール物質、位相物質等の奇妙な物質の世界を、優れたストーリーテリングと独創的な比喩で直感的かつ詳しく解説した本だ。著者である韓政勲（ハン・ジョンフン）博士は、一般向けのシリーズ講演や執筆活動を行っているが、時間や紙面には限りがあることがもどかしく、“物質”の話を人々と存分に共有したいという思いで本書を構想した。著者は本書で、古代ギリシャの四元素説に始まり量子科学時代の位相物質に至る“物質”の歴史を、物理学者たちの人生とその時代背景を機軸、自分の経験を縦糸にしておもしろく解説している。

46	やめてよかったことリスト	ソ・ユンフ	BADA Publishing Co., Ltd.	エッセイ (人文/科学)	2021.05.31	20歳でデビューし、“20代”という時期を詳らかに詩に表現してきた人ソ・ユンフの、自身の人生に対する穏やかな愛情が詰まった散文集。人生の重荷を下ろすためにやめると決心した事柄と、その過程を記録したもので、この行動を通して著者は人生の余白を求めはじめる。すぐにやめられると思っていたことなのに、リストに書くこと迷いが生じ、自身の生活を支えてきた要素を簡単には整理できないことに気づく。そして、リストアップする過程が完璧な計画を実行するためのものでは決してなく、柔軟に生活するためのフレキシブルさを身に付けるものだったことを悟る。著者が『やめてよかったことリスト』を通じて生活のバランスを取り戻していく過程は、今日よりも明日をよりよく生きたいと思う人に勇気を与えてくれる。
47	気の強い娘さんです	オシャベリ	ポルチェ	エッセイ (人文/科学)	2021.05.20	チャンネル登録者16万5千人、延べ視聴数830万回を誇るYouTubeチャンネル“オシャベリ (ハマルノムマン)”の運営者カン・ミンジとソ・ソルのストーリー。二人は社会が求める女性らしさを捨て、自分たちの道を切り開いている。幼少時からオシャベリの素質があった二人が、フェミニズムを扱うYouTubeチャンネルを運営するなかで起こった出来事のみならず、どうしたら韓国社会で女性として“まとも”に生きられるかを悩んだ痕跡をも愉快に伝える。結婚という制度に組み込まれることが人生の唯一の方策のように吹聴される韓国社会において、非婚を宣言した女性として生きること必然的に直面する点についても言及する。家を買おうとすると不利な条件で新婚夫婦と競わなくてはならないし、いつか挙げるはずだった結婚式のために祝儀を準備してくれた両親に対する負い目を心の片隅に抱えながら生きていかなければならない、といった現実を余すことなく伝えつつも、世間が少しずつ変わってほしいという思いで、これまでの道のりを語る。
48	空間の未来	ユ・ヒョンジュン	ウルコ出版社	エッセイ (人文/科学)	2021.04.25	我々が暮らす空間は、その中の人間の変化に合わせて変化してきた。しかし新型コロナウイルスによって我々の日常が変化したこと、空間の変化の速度も加速し、進行方向も少しずれた。本書は、家、会社、学校、商業施設、公園、地方都市、物流トンネルなどの生活空間や、生活と密接している空間の近未来を考察する。人類は常に世界の変化を予測し、未来に備えようとする。現在のよう大変化に直面すると、その望みは増大せざるを得ず、それに合わせて多分野の専門家たちが予測を立てている。本書は、建築家である著者が今後の空間の変化を予測した産物だ。当然ながら未来を正確に予測することはできない。しかし他分野の専門家たちの意見と著者の意見を合わせて考えれば、より正確な予測が可能になり、進むべき方向を把握することに寄与するだろう。
49	自分が誰なのかニュートンに尋ねた (副題: 物理学で自分、私たち、世の中を理解する方法)	キム・ボムジュン	21世紀ブックス	エッセイ (人文/科学)	2021.03.24	成均館大学物理学科教授のキム・ボムジュンの新刊『自分が誰なのかニュートンに尋ねた』は、物理学の見方を通して自分自身と自分を取り巻く世界、延いては未来の生き方を探究する本だ。巨大な宇宙の中のチリのような自分を理解するために、物理学は自分の外部を観察する。複雑な理論と難しい公式ではなく、日常の中の小さな不思議や人間と世界への好奇心を通じて、物理学を易しく教えてくれる。宇宙、時空間、原子、エントロピーなど、難解でしかなかった物理学を楽しく学んで人生の意味まで発見させてくれる、心温まる物理学の特別授業だ。
50	数学、思考の技術	朴鍾夏	金寧 (キムヨン) 社	エッセイ (人文/科学)	2015.04.27	数学の本能は思考。これまで知らなかった数学の新しい可能性を発見できる本だ。今や入社試験に英才の発掘、芸能番組やゲームの世界でも数学的思考力が語られる時代である。なぜなら数学の本質である“思考”を発見したからだ。『数学、思考の技術』では、誤解されていた数学のおもしろさを実感できる、いろいろな思考実験が紹介されている。数学的思考を検証し熟中させてくれる130以上の思考実験と疑問、そして数学で世界を変えようとする人々の話が収められている。スケールの大きい多種多様な思考実験と正解を求める過程を眺めるだけでも、創意力や論理力などの数学的思考力が培われ、自分でも気づかないうちに数学に親しんでいるはずだ。
51	部長の話し方	キム・ボムジュン	センシオ	エッセイ (人文/科学)	2021.04.05	会社で働いていて人に腹を立てる状況は、2種類に分類できる。部長 (上司) が部下に腹を立てるパターンと、部下が部長に腹を立てるパターン。部長が腹を立てる理由は枚挙に暇がない。逆に部下が部長に腹を立てる理由は実質ただ一つ、話し方だ。部長が自分ですべての仕事を引き受けたいのでなければ、どのような話し方が部下を苛立たせるのかを知っておく必要がある。尊敬を集めるとまではいなくても、部長として認められたいければ、部署の目標達成のために部長がとるべき行動——例えば部員と目標を共有し、部員の性格に合う業務を振り、やる気を起こさせ、会社にサポートを求める——この全部が部長の話し方ひとつでまったく望まない方向に進むということを知らなければならない。話し方こそ、部長が身に付けるべきもっとも洗練された高度なスキルなのだ。部員が変わるのを待つのはやめよう。部長の上司が変わるのを待つのもやめよう。そんなことは起こらないのだから。多くの自己啓発書が主張する通り、自分が変わることでしか周囲は変わらない。だから、話し方を変えてみよう。状況別に数パターンずつを暗記するだけでいい。お金がかかるわけでもないのだから、やらない理由はない。
52	Nジョブラーのお金は眠らない	ヨ・ドゥン	ネクサスBIZ	エッセイ (人文/科学)	2021.05.25	仕事終わりに楽しむ趣味を、クリエイティブな仕事にできるとしたら? 自分を思いっきり表現できる方法が他にあるとしたら? さらにそれらに経済的な自由まで与えられたとしたら? 人生はこの上なく素晴らしいものになるだろう。旅行に行っても買い物をして、もどかしさが解消されないのなら、いろんな“別キャラ”になって生き生きとした毎日を過ごしてみよう。

53	記憶と記録のあいだ	李昌宰	石枕	エッセイ (人文/科学)	2020.01.28	<p>コロンビア大学出版部に25年間勤務している装丁デザイナーが、これまでに読んだ本と手掛けた本について書いたエッセイ。ジウンは4歳で初めて本を読んだときから、読書で自らの世界を構築し、装丁デザイナーとして20年余生計を立て、本をまさに人生そのものとしてきた。</p> <p>『記憶と記録のあいだ』は、本を媒介にした出来事と記憶を綿密に書き記しており、その書籍リストからジウンの一貫した観察力と感情が窺える。外国で長年書籍関連の仕事に携わってきた一人の専門家の記録であると同時に、母国語を忘れないディアスポラが本に抱く憧憬と献辞であり、移民であるバイリンガルによる本を媒介とした交差的文化読解であり、場所と時代の感覚が染み込んだ散文であるともいえる。ゆえに、歓喜と苦痛、関係と断絶、願望の実現と挫折など、読者も共感できる人生のストーリーが込められている。祖国を眺める移民の哀切な視線を感じ、アジア圏の文化交流の一面を知ることができる。</p> <p>写真：傍瞬焔（ノ・スタク）、安玉鉉（アン・オクヒョン）</p>
54	ブタを育てた菜食主義者	イ・ドンホ	チャンピ	エッセイ (人文/科学)	2021.06.01	<p>退役軍人の旅行ライターというユニークな経歴を持つ著者は、28歳という若さで農村に里帰りする。そこで畜産動物と業界の劣悪な現実を目撃した著者は菜食主義者になるが、さまざまな疑問を抱きだす。</p> <p>人間は本来雑食なのに、肉食自体が問題だといえるのだろうか。動物を虐待する畜産方式に問題があるのなら、良好な環境で幸せに育った動物の肉を食べるのは構わないのではないだろうか。もしかしたらそれこそ“自然の摂理”ではないのか。著者はこのような疑問を抱きながら、自ら3頭のブタを庭で育てることにする。緊迫感溢れるブタの飼育現場から、目をそむけたくなるその最期の瞬間まで、手に汗握る一篇のドラマが好奇心をかきたてる。</p> <p>人間は他の生命を食べて生きている。著者は庭でブタを育てることで、我々が食べる命の尊さや自然の美しい循環を学び、動物を育てて食べることの意味を苦悩する。そしてその苦悩は、安い肉を大量生産する工場式畜産の実態や、大規模畜産が引き起こす環境汚染問題などにも及ぶ。</p>
55	ヴンダーカンマー	尹慶熙 (ユン・ギョンヒ)	文学と知性社	エッセイ (人文/科学)	2021.05.31	<p>著者は“驚異の部屋”を意味するヴンダーカンマー（Wunderkammer）、すなわち近代初期のヨーロッパの支配者層や学者が蒐集した珍品を陳列した部屋の説明から始め、イメージ、記憶、テキストを動員し、読者をして各自が脳内に密かに持っているヴンダーカンマーを意識せしめる。</p> <p>幼いころ窓の外に見ていた風景や、初めての遠足での宝探し、お母さんの編み物、親戚の家の押し入れでの冒険、名も無いドイツのパン屋の匂い、黒い森シュヴァルツヴァルトの暗闇、誰かの碑の上に置かれた石、解析不可能な夢、ラブレターの欠伸、ヴァルター・ベンヤミンのチェスを指す人形、ロラン・バルトの同語反復、そしてさまざまな絵画と音楽、詩の贈り物……。現在の欲望と不満の根源に迫ろうとする情熱の中で、数多くのストーリーが出現し、形を成す。</p>
56	かつこいいのは全部お姉ちゃん	ファン・ソンウ	イボム	エッセイ (人文/科学)	2021.05.17	<p>年齢や世代を問わず、自分らしい物語を書いている9人の女性小説家、キム・ユラ、キム・ボラ、イ・スリア、チャン・ヘヨン、チョン・ジユン、チャヤ、チェジエ、イ・スジョンのインタビュー集。リアルな対話で構成され、人生の物語をありのまま伝えることを可能にするインタビューという方式によって、2020年代の韓国女性の歴史を記録した。</p> <p>本書では、9人の輝かしい実績のみならず、過去の失敗や過ち、現在の不安までもが詳細に記されている。</p> <p>我々は成功者のストーリーに心動かされ応援するが、それを自分の人生と結び付けることにしばしば失敗する。彼女たちのように懸命に生きてこなかった自分が悪いのだろうか。成功者は失敗を武勇伝として共有するが、不安と自己不信を露わにすることはない。本書では、敬愛すべき9人の女性が自身の不安と自己不信を隠さずに吐露しているということも、また大きな意義であるといえる。</p>
57	芸術のひだ	羅喜徳 (ナ・ヒドク)	心の散歩 (Maumsanchaek Publishing)	エッセイ (人文/科学)	2021.04.30	<p>詩人羅喜徳（ナ・ヒドク）の芸術エッセイ『芸術のひだ』は、芸術作品が詩になる前に、著者が作品を目にした瞬間の反応と感想が散文形式で書かれている。</p> <p>本書に登場するアリエス・ヴァルダ、坂本龍一、ケーテ・コルヴィッツ、ロスコ、チョ・ドンジンなどの芸術家たちは、ジャンルも個性も多様だが、著者に“詩的なものと芸術的なもの”を発見させてくれたという点で共通している。著者が詩的自我と批評的自我を同時に発揮して生まれた30編の文章は、特有の共感力と出来事を媒介に、芸術作品を前に我々に芽生えるなんともいえない感情を掬い取ってくれる。</p> <p>クモが細い縦糸と横糸を紡ぐように、著者が言葉で織り上げる景色は読者の感覚を呼び起こし、芸術の隠された“ひだ”に導く。何より芸術の世界から汲み上げたメッセージと姿勢——自然を中心とする生態的感受性（第一部）、女性主義のアイデンティティの探求（第二部）、芸術家的自意識の探究（第三部）、ジャンルの境界を揺さぶる実験（第四部）、詩とその他の芸術との出会い（第五部）——は、現在の我々に人生の限界を超えさせようとする洞察に満ちている。</p>
58	貧困の文法	ソ・ジュンチョル	青い林	エッセイ (人文/科学)	2020.11.30	<p>都市研究者ソ・ジュンチョルが2015年から2019年にかけて行った研究結果をまとめた本。都会で廃品を集める老女の生涯的特徴と廃品回収という職業を媒介に、貧困に切り込む。彼女らはどのような経路を歩んで貧困に至ったのか。分かれ道でのどんな選択が、貧困に引きずり込んだのか。これまでの人生と廃品回収を始めた理由、回収の過程で起こるさまざまな競争、老人の地域共同体を観察し、貧困の構造を考察する。その構造は、個人の努力で抜け出せるものなのだろうか。</p>

59	5番レーン	ウン・ソ ホル	文学ドンネ	児童／青少 年	2020.09.14	水泳部に所属する13歳の子どもたちの喜びや苦しみの物語。児童文学では珍しいスポーツ物である点が注目された。水泳というテーマを通じて“心と体の成長”を描いている。 カン・ナルは13歳。得意な種目は自由形だ。全国少年体育大会で幾度もメダルに輝いた経歴を持つ、誰もが認める漢江小学校水泳部のエースだ。ナルは記録を0.1秒更新するために、学校のプールを100周以上泳ぎ、授業で夢を聞かれると、オリンピックメダルだと断言する。しかし、なぜ水泳をするのか、という疑問を抱いたことはない。いつも当たり前のように水に飛び込み、優勝目指して水を掻き分けるだけ。 突然のライバルの登場とともに、混乱に陥るナル。誰よりも熱心に水を掻きながら全力を尽くしてきたナルは、自分の汗つぶに誇りを持つため、水の外に逃げださないために、不甲斐ない自分と正面から向き合う。失敗を一つ一つ振り返りながらも、前を向いて進むナルの姿は、深い感動を与えてくれる。
60	空くじのないガ チャマシ	クァク・ ユジン	ピリヨンソ	児童／青少 年（童話）	2020.03.01	ある文具店の前に置かれた“空くじ”のないガチャマシを媒介に起こる魔法のような出来事 を描いた、ファンタジー童話。悲しみと喪失感に沈んだ子どもが、空くじのないガチャマシを 介して人間関係を少しずつ再構築し、健康な日常を取り戻していくストーリーを、淡々と、し かし胸に迫るように描き出す。 500ウォン硬貨を入れてつまみをひねれば、空くじなしで何かが出てくるガチャマシという ユニークな設定によって好奇心が刺激され、物語に引き込まれる。主人公のヒスがなぜガチャ マシを嫌いになったのか、現在ヒスが直面している状況がどのようなものか、という疑問に 答えないうまま進んでいくストーリーは、空くじのないガチャマシから出てくる素晴らしい物 と出合って予想もしない展開を迎える。 読み終わった後、この物語で何が象徴されていたかを理解して温かい感情がこみ上げるだろ う。チャ・サンミによる感情豊かな挿絵が、さらなる余韻を残す。本書は低学年の子どもが触 れることのできる、最高の文学的喜びだ。
61	今は旅行中	キム・ウ ジュ	チャンピ	児童／青少 年（童話）	2020.05.01	2017年に創作活動を始めたキム・ウジュ初の童話。教室やタクシー、空港、スーパーマ ーケットなどを舞台に、今日を生きる子どもたちの姿を現実にも即して描いた7編の童話を収録し ている。苦境下の子どもたちが社会から疎外されているという問題を取り上げ、新鮮な見方で 現実を提示するという手法によって読者に興味と感動を呼び起こす著者の力量が頼もしい。
62	壁塗り職人	李明煥	ハンソルス ブック	児童／青少 年（童話）	2020.06.17	明け方、眠っている子どもを置いて家を出るお父さん。起きて見送ったことは一度もないけれ ど、お父さんは家族の生活と未来を、心を込めて黙々と築いてくれた。その隣には、お父さん の不在を静かに埋めてくれるお母さんがいた。 お父さんは一ヶ月間仕事をすると、お土産にイシモチを買ってきてくれた。仕事に行くときは 眠っている子どもたちを置いてそと家を出た。お父さんが建物の壁に漆喰を塗ってタイルを 貼っているころ、“僕”は家で絵を描く。お父さんが隣にいても、家族で出かける場所のあ ちらこちらにお父さんの作品があった。だから僕は、胸を張っていられた。 本書には、家族のために苦しい毎日を懸命に生きる父と、子どもたちのそばで生活を守る母、 街で父の仕事を見つけて寂しさを癒す“僕”の姿が描かれている。
63	私たちはこんに ちは	バク・ ジュン	ナンダ	児童／青少 年（童話）	2021.03.20	初の詩集『あなたを名づけて何日も楽しんだ』と、初の散文集『泣いたからって何も変わらない けれど』を発表した詩人バク・ジュンが初めて書いた詩の絵本。西洋画家キム・ハンナが挿 絵を手掛けた。 主人公は著者の父の飼犬“タンピ”。著者の二作目の詩集『私たちが一緒に梅雨を見ることも あるかもしれない』の中の“タンピ”という詩を読むと、より味わい深いだろう。その中に描写 されている背景を背負って生きているタンピのもとに、ある日鳥がやってくる。タンピと鳥が 友だちになる過程の中で、自分なりの“こんにちは”を再確認させてくれる作品だ。
64	イバラバニヤム ニヤム	李芝殷	四季節出版社	児童／青少 年（童話）	2020.06.10	マシュマロが暮らす平和な村。美味しい食べ物とふかふかの地面、眠気をさそうのんびりした 村の丘の向こうから、ある日雷のような声が聞こえてくる。イバラバニヤムニヤム……イバ ラバニヤムニヤム。だんだん近づいてくる音の出元を探すと、山みたいに大きい真っ黒な毛む くじらが座り込んでいた。そうだったら、いくらのんびり屋のマシュマロでもおとなしくし ているわけにはいかない。それにしても、あの声はいったい何だろう？ムシムシ？まさかム シヤムシヤ？捕まえて食べちゃうぞ、ってこと？2021年ポロニヤ児童図書展の幼児向けコ ミック部門大賞受賞作。
65	ものすごい雪	朴賢賢	タルクリム	児童／青少 年（童話）	2020.11.27	ページの大きな面積を余白が占めるが、それが雪だと想像すると壮大なスケールを感じられ る。想像力を飛躍させれば、本の向こう側のイメージを創り出すことだってできる。印刷に白 いインクは存在しない。本書では何も描かれていない白い紙が、雪や雪だるまになる。
66	水になる夢	ルシッ ド・ フォール (文) スー ジー・ リー (絵)	チョンオラム アイ	児童／青少 年（童話）	2020.05.07	いつまでも大切にしたい歌『水になる夢』が絵本になって登場。歌手ルシッド・フォールの一 篇の詩のような美しい歌が、スージー・リーの挿絵と相まって深みを増している。 パワフルだけれど穏やかで、強いけれど柔軟な水のイメージを、繊細な水彩画で力強く表現し ている。これまでのスージー・リーの絵本にも登場した“青”と“水”の表現がもっとも突出した 作品だ。QRコードを読み込んで曲を聴きながらページをめくれば、目だけを使って読むとき とはまた別の感動が胸にこみあげるだろう。 本書は親子がともに楽しめる点も特長だ。歌詞が素晴らしい絵になって広がっていく絵本を一 緒に読めば、子どもの思い出に残る大切な時間を過ごせるだろう。

67	おいしいものはおいしい	金羊美 (文) キム・ヒョウン (絵)	時空ジュニア	児童／青少年 (童話)	2019.12.05	本書は、子どもの視覚的な流れと意識の流れが自由奔放に描かれた“味”の物語であり、子どもの成長アルバムでもある。 物語は主人公である“わたし”のささやかな観察から始まる。鳥は柿をついばみ、猫のアノはキュウリを盗み食います。お母さんはクローバーには水をやるが、サボテンには水をやらない。弟のヨンウは何でも口に入れてしまう年頃だ。今日はボタンを食べようとして見つかった。観察は子どもの想像を刺激する。 スパゲッティを食べたら体の中に道ができそうだし、レモンジュースはワンピースを黄色く染めてしまいそう。三角のピザはクリスマスツリーみたいだし、お兄ちゃんのウンチは不味いケーキみたい。おいしい食べ物は、そのイメージや匂い、色、食べる音、食べる場所が一体となって心象を刺激する。子どもは食べ物を見ながらひっきりなしに愉快な想像を繰り広げ、愉快なストーリーを生み出す。
68	オットセイおばあちゃん	オ・ミギョン (文) イ・ミヨンエ (絵)	砂の粒	児童／青少年 (童話)	2020.01.30	海女を題材にした絵本。著者のオ・ミギョンは、2016年にユネスコ人類無形遺産に登録された済州島の海女とアイルランドのオットセイの伝説を融合させて、新しい海女の物語を創造した。済州地域の特色を生かし、おばあさんのセリフに済州言葉を使った。 挿絵のイ・ミヨンエは、済州島の海女の姿を写実的・象徴的に描き、刻々と変化する済州の海を色彩豊かな筆で説得力たっぷりに表現した。荒波と風とともに生きてきた済州のおばあさんたちの強靭さと深い愛が伝わってくる。
69	思春期 VS. 更年期	諸星恩 (チェ・ソウン) イ・スンヨン	ケアムナム	児童／青少年 (童話)	2020.02.05	思春期の娘と更年期の母親の話を生き生きと描いた作品。なんでも母親のせいにする“思春期の法則”を遵守中の娘ルナと、更年期という人生の新たな曲がり角に差し掛かった母親の物語を、双方の立場から現実的に解きほぐし、相互理解を促す。また、この過程を通してさらに成長する子どもたちの姿が感動的に表現されている。 著者の諸星恩(チェ・ソウン)は、自身の思春期の娘との会話していたとき、ふと「あなた思春期なの?」と聞いてしまった自分に気づいたと告白する。自分が思春期のときにもっとも言われなかった言葉なのに、知らず知らずのうちに娘に言っていたことに気づき、娘をより理解したいと思いから本書を書きはじめたそうだ。
70	ママ自動販売機	曹敬姫	黄色いブタ	児童／青少年 (童話)	2019.08.30	シヌのママは忙しい。一緒に遊園地に行く約束も守れないくらい。土曜日も働くママのせいで、娘のシヌは退屈している。それなのに仕事から帰ってきたママはシヌを、スマホで遊んでばかりと叱り、早くお風呂に入りなさいと急かす。シヌはそんなママは薄情だと思い、憎らしいママなんていなくなればいいのに、と思いつつベッドに入る。 ところが起きたら、本当にママが消えていた。あちこち探し回ってママの部屋のドアを開けると、そこにはあったのは巨大なママ自動販売機。自分を押し、と言っている。ママと一緒にしたかったことが何でもできる自動販売機だったのだ。自動販売機から現れたママたちは、シヌと一緒にピザを作ったり、お姫様ごっこをしたり、ボールで遊んだり、自撮りをしたり。そうしていつしか、シヌは気づく。ママ自動販売機から現れたママと一緒にした遊びは、すべて本物のママとしていた遊びだったこと。ママはシヌを深く愛しているってこと。子どもの心を温もりで包んでくれる作品だ。
71	はさまっちゃった	キム・ゴウン	千の望み	児童／青少年 (絵本)	2021.04.01	ある子どもが家に帰る途中、白い犬が白い雲のあいだにはさまっているのを見つける。子どもは梯子を上って犬を下ろしてやった。翌日は、スーパーのおばあさんのシウのあいだに蚊の長い口がはさまっているのを見つけた。子どもはそっと近づいて、シウを伸ばして蚊を逃がしてやった。その翌日には、マンホールにクチバシがはさまったペンギンを助けてやった。 そうやってその子は毎日、ゴミ箱にはさまったクマ、おじさんのお尻のあいだにはさまったスカンク、サッカーゴールのネットにはさまった大ダコ、黄色いオナラのあいだにはさまった人々を助けてやった。ヘトヘトに疲れて家に帰ってくると、ママとパパが大声で怒鳴り合っていた。よく見ると、ママとパパのあいだに、ケンカの妖精がはさまっている。その子は果たして、ケンカの妖精を救い出すことができるのだろうか。
72	今日は絶対ひとりで寝るんだ	ホン・スヨン	ウンジンジュニア	児童／青少年 (絵本)	2021.05.26	子どもが初めて一人で寝るときに抱くいろんな感情を、軽やかな筆致で表現した愉快な絵本。子どもが自分で決めた数字の“十”まで数えながら話が展開していく構造が新鮮だ。七、八、九、九と半、九と半の半……。 “十”が近づくとつれ暗さを増す色彩や、キラキラと光る子ウサギの目の変化などによって子どもの不安を可憐らしく表現し、子どもが感じる恐怖を受け入れ、慰める。 とうとう「十!」と叫ぶと同時に「ママ! ポクは本当はママがいいんだ」と母ウサギに抱きつく子ウサギの姿は、暗がりに対する恐れや、一人で眠ることからくる不安を解消し、実際に子どもたちが感じるであろう恐怖を和らげてくれる。自信、期待、不安、恐怖、焦燥、そしてこれらを克服する過程で芽生えるさまざまな感情をバランスよく描く本書は、ベッドで子どもたちが経験するさまざまな試練や感情を軽快に伝える。
73	イ・セリン・ガイド	キム・ジョンヨン	コナンブックス	マンガ／グラフィックノベル	2021.02.01	実在人物ながらリアルで魅力的な食品サンプル職人イ・セリンを主人公に、食べ物に関する話の数々に鮮やかな想像を加え、ユニークながらも現実にもありそうな世界を一冊の中に緻密に構築したマンガ作品。 15のメニューの一つ一つに関するイ・セリンの長い独白を読み進めると、著者がどうして食べ物をテーマに選んだのか納得がいくだろう。そうして、満腹になりそうなくらいたくさんのお話を一つ一つ読みながら、“わたしも同じ!”と手を挙げたくなるほど、共感するはずだ。

74	チョンニョン	ソ・イレ (文)、 ナモン (絵)	文学ドンネ	マンガ/グ ラフィック ノベル	2020.4.27 (1) 2020.08.31(2)	1956年の木浦。市場に響く『南原山城』の歌声に誘われた人々が集まってくる。短い曲が終わる否や轟く歓声。金も学も無いが、歌の才能にだけは恵まれたチョンニョンは、ソウルから来た伝統劇団の舞台を見て、自分もソウルに行けば成功の道が開かれると考える。しかしチョンニョンの母親は、伝統劇団を“サタンの巢窟”と呼び、上京するために貯めていたお金を持っていってしまう。自分の才能と夢を理解してくれない母親に怒りを抱くチョンニョン。母親と大げんかした末にソウルに行き、当代最高の女性伝統劇団“メラン国劇団”の門を叩く。しかし、自信とお金を稼ぎたいという気持ちだけで歌うチョンニョンに、芸術はあまりにも難解で不慣れな世界だった。誰もが認める実力に加えて努力を怠らない研究生のホ・ヨンソを見ると、広い世界を知らなかった自分がただ恥ずかしかった。そのうえ、初対面の人々との集団生活も楽ではない。ペアを組んだ先輩は厳しく、自分を助けてくれようとは少しも思っていないようだ……。何ひとつ思い通りにいかない広い世界を舞台に、チョンニョンはスターに、そして新しい“私”になれるのだろうか？
75	カデギ、荷捌き場の生活	イ・ジョン チョル	麦出版	マンガ/グ ラフィック ノベル	2019.05.13	宅配サービスは生活を便利にしてくれるが、その裏にあるのは厳しい労働である。『カデギ』は、たったの一日で逃げてしまう人もいるほど悪名高い、宅配便の荷捌き場におけるアルバイトの実態を、詳らかに描いたマンガだ。マンガ家を夢見てソウルにやってきた主人公イ・バダは、宅配のアルバイトをしながら夢を叶えるために懸命に生きている。6年間宅配をしながらマンガを描いていた著者の実体験を基にしており、取材とインタビューだけでは引き出すことのできない、リアルな宅配の現場の声を聞くことができる。
76	月で朝食を	李秀蓮	WISDOM HOUSE Inc.	マンガ/グ ラフィック ノベル	2020.08.05	交友関係に過敏で悩み多き思春期の子どもや青年が持つ繊細さと複雑な感情を丁寧に表現した絵本。いじめられっ子のウサギと、唯一の友人であり傍観者であるクマの物語である。ウサギとクマの現実と、映画『ティファニーで朝食を』の幻想的な雰囲気と交差する構造が特徴的だ。また若者への暴力問題が、野良猫への無差別虐待問題になぞらえて描かれている。幾重にもなった層が緻密に構築されている本書の語り手は、驚くことにクマだ。傍観者のクマが、知らぬがりに慣れてしまった世の中のすべてのクマさんに送るメッセージが込められている。
77	ありふれた兄妹 科学探検隊	よくいる 兄妹 (ハ ン・ウ トウム、 チャン・ ダウン)	ジュニアキム ヨン社	マンガ/グ ラフィック ノベル	2021.05.24	初めて科学に接する子どもたちが主要な内容を予習できる、初等科学入門書。“よくいる兄妹”が第一線の科学専門家と一緒に宇宙、地球、人体、ジャングルを旅しながら、易しく楽しく科学の知識を身に付ける。小学校の科学の教科書の内容が網羅されており、生活科学情報や科学関連最新 이슈、韓国の関連情報なども補足されている。いつものように賑やかに遊んでいたウトウムとエイミーの兄妹が、村の林で偶然見つけた不思議な研究所。二人はそこに隠された謎のゼリーを食べると特別な能力を身に付ける。宇宙に散らばった7つのゼリーを集めれば願いが叶うという言葉に、二人は研究員たちと一緒に科学探検隊を結成する。しかし地球上最大の悪玉オヤツ団が現れ、探検隊の進路を何度も阻む……。
78	Bの日記 (全3 巻)	作家1	ブックログカ ンパニー	マンガ/グ ラフィック ノベル	2021.06.25	『脱コルセット日記』の続編となる『Bの日記』。『脱コルセット日記』は外面的なコルセットを脱ぐことを題材にしていたが、『Bの日記』は一歩進んで女性の心理的・精神的コルセットとして作用してきた“結婚”の問題、正確には“非婚”を取り上げている。興味深いのは『脱コルセット日記』の続編であるにも関わらず、10年前の2011年に遡り、コルセットを脱ぐ前のト・スリに焦点を当てている点だ。『脱コルセット日記』の3人の主人公の中で、ト・スリはもっとも確固とした自己哲学を持っていた人物だ。脱コルセットをついに遂げたキム・ペムヒと、コルセットを手放せずに怯えるペク・ロアの悩みを聞き、励ましてやっていた精神的なメンター、ト・スリはかつてどのような人物だったのだろうか。